

## マップコンテストを通じた子供の防災・防犯教育への取り組み ——「第8回夏休みにみんなで作る地域の安全安心マップコンテスト」の事業報告——

崔 明姫\*・赤石 直美\*\*・米島 万有子\*\*\*・石田 優子\*・金 度源\*

### I. はじめに

2011年東日本大震災の巨大津波に直撃された岩手県釜石市で、死者・行方不明者が1,000人以上出たものの、小学生ほぼ全員が生き抜いた事例から、日頃からの徹底した防災教育の重要性が改めて認識されている。日本では地震津波以外にも、2014年に発生した広島の大規模な土砂災害や御岳山の噴火など、人の命を奪う自然災害が頻発し、将来の防災の担い手となる子供たちへの防災教育は必要不可欠である。

また、自然災害のみならず、子供の死因の1位である不慮の事故（交通事故、転落、溺死）<sup>1)</sup>や犯罪事件の発生など、子供たちを取り巻くリスクが多様化しつつある。このような様々な危険にさらされている子供たちを守っていくためには、学校、家庭、地域が連携しながら、安全安心な環境を作るだけでなく、日頃からの防災・防犯教育を通じた子供自身の危機予測能力と回避能力を育むことが重要である。

1995年の阪神淡路大震災をきっかけに、地域の自主防災活動の重要性が認識され、その一環として地域の安全安心マップづくりが各地で展開されてきた。このようなマップづくりは子供を対象とした学校機関の防災・防犯教育や、警察の子供向けの事故防止、自主防犯の教育活動にも多く取り入れられている<sup>2)</sup>。大人が一方的に危険要素を喚起することではなく、目線の異なる子供と大人が意見を交しながら、危険な場所と安全な場所を確認し、マップづくりを体験することで、実践を通じた子供たちの防災・防犯意識を向上することができる。

立命館大学歴史都市防災研究所では、このような子供の防災・防犯教育と地域の防災活動を支援することを目的とし、2007年から小学生と保護者を対象とした「夏

休みにみんなで作る地域の安全安心マップコンテスト」を実施してきた<sup>3)</sup>。本稿は、今年第8回を迎える地域の安全安心マップコンテストの実施状況と成果を報告するとともに、応募者へのアンケート調査を通じた安全安心マップづくりの意義と問題点を検討したものである。

### II. 事業概要

#### 1. 企画趣旨

自然災害や、交通事故、不審者による犯罪などの危険から身を守るためには、身近な地域の情報を事前に把握し、危険に備える必要がある。しかし、多くの子供は情報の収集能力が不十分であるため、大人と一緒に地域の情報を集め、マップを作成することで、どのような危険が潜んでいるのかを、自らの体験を通じて理解したうえで、周囲とその情報を共有することができる考える。当研究所では、前述したようにこのようなマップづくりを通じて地域の安全安心を考える取り組みを評価し、促進するために、2007年度より小学生を対象に「地域の安全安心マップコンテスト」を実施してきた。

#### 2. 応募資格と課題内容

本コンテストは、小学生の個人またはグループを対象とし、日本国内のみならず、海外からの応募も受け付けていた。マップ作成に参加した子供の安全の確保と本コンテストの趣旨から、いずれの場合にも20歳以上の大人（保護者または教員、地域住民）が1名以上付き添うことを指示した。なお、グループの場合は原則として小学生5名までが参加できるようにした。

マップのテーマについては、地震、津波、洪水、土砂災害などの自然災害発生時の避難経路・場所に関するマップや、通学時の交通安全マップ、子供の遊び場の安全安心マップ、子供・大人からみたヒヤリハットマップなど、地域の安全安心に関するものであれば自由に作成してもらったこととした。ただし、作成したマップにはタイトルをつけることを求めた。対象地域のスケールは特

\* 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員

\*\* 立命館大学文学部 非常勤講師

\*\*\* 立命館大学グローバル・イノベーション研究機構 専門研究員

に決めていないが、応募作品を最後に歴史都市防災研究所の展示ルームに展示するため、作品のサイズは画用紙二つ切以上、模造紙2枚程度以内とした。

また、歴史都市防災研究所のホームページには「安全安心マップかんたんマニュアル」をアップロードし、応募者たちがマップを作成する際の参考資料として提供した。

### 3. 広報活動と募集期間

コンテストの広報のため、2014年3月から5月までに、全国の小学校、教育関連機関、官公庁などを対象に、620件の募集要項を、チラシ、ポスターとともに配布した。原則一つの小学校に1部配布することとし、チラシの追加配布の申込みがある小学校や機関に対しては、必要人数分を追加送付することにした。また、『GoGo土曜塾』（京都市教育委員会生涯学習部運営）や『Yahooきっず』、防災教育のチャレンジプラン、歴史都市防災研究所のウェブサイト上などでも広報を行った。

第8回マップコンテストの募集期間については、例年通りに夏休みの期間を利用してマップを作成し、応募してもらうように、2014年8月25日（月）から2014年9月30日（火）までとした。

### 4. 講習会の実施

立命館大学の教員や研究員を中心に、要請があった地域住民や小学校を対象に「地域の安全安心マップづくり」の講習会を実施した。今年も京都教育大学附属京都小学校と千葉県八千代市みどりが丘小学校の2箇所で開催された。

京都教育大学附属京都小学校では、3年生の社会科の授業の一環として、90名の小学生が参加した。授業は「マップづくりの説明（5月13日）」、「小学校周辺のフィールドワークの実施（5月29日）」、「マップの作成（6月5日）」、「発表会の実施（6月12日）」の4回に分けて実施された。5人を1グループとし、18グループから交通安全や防犯面の安全安心をテーマとした多種多様なマップが作成され、それぞれのグループで気付いた点や得られた情報を交換することができた。最後の発表会では、子供の視点からの分かりやすい安全安心マップを調べるため、発表だけではなく、作成したマップと発表の様子を子供自身で評価できるように、簡単な評価表による評価を行った。その結果、子供に対しては、文字が大きく鮮やかな色のマップのほうが分かりやすいという傾向があることがわかった。

八千代市のみどりが丘小学校では、学校支援委員会が主催した8月2日～3日の「ワールドサイエンス防災キャンプ」の一環として、安全安心マップづくりの講習会が実施された。講習会は防災キャンプに参加された小学生37人と保護者35人を対象とし、1時間という限られた時間しかとれなかったため、その前日、前日に事前のフィールドワークを実施させることにした。当日は、災害、交通事故、犯罪リスクの简单介绍とマップ作成の説明、事前調査に基づいたマップづくりと発表会を行った。

### 5. 関連機関の協賛と後援

第8回マップコンテストは、NTT西日本京都支店、株式会社パスコ、日本ミクニヤ株式会社、フレントリー株式会社、株式会社帝国書院の協賛を得るとともに、国土地理院、コクヨマーケティング株式会社、京都新聞社、KBS京都、京都市、公益財団法人京都市景観・まちづくりセンター、人文地理学会、立命館地理学会、NPO災害から文化財を守る会の後援を得て行われた。

## Ⅲ. コンテストの実施結果

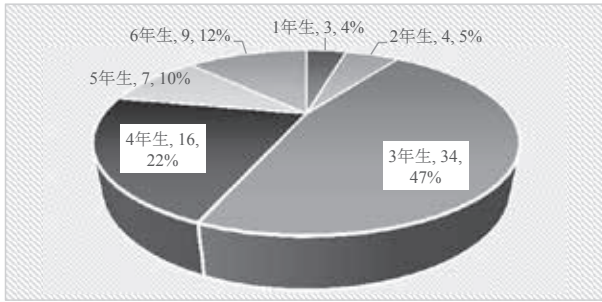
### 1. 応募状況

第8回マップコンテストには、8府県から48の作品の応募があった。そのうち、京都府からの応募が17点（うち講習会を実施した京都教育大学附属京都小学校から7点）で最も多く、その次は夏休みの宿題として取り入れられた埼玉県北本市からの応募が13点、8月に大規模土砂災害が発生した広島県からの応募が11点であった。また、千葉県と兵庫県からそれぞれ2点、大阪府、神奈川県、滋賀県からそれぞれ1点の応募があった。

参加者の構成から見ると、子供の参加者数は73人、保護者の参加者数は40人であった。子供の参加者のうち、3年生が34名（47%）と最も多い割合を占めた。ただし、この中には京都教育大学附属京都小学校の3年生が23人含まれている。その次は4年生の参加が16名で22%を占め、3年生と4年生の参加がもっとも大きい割合を占めた（第1図）。

### 2. 審査方法と結果

応募された作品は、防災分野の教授と専門家など6名の審査委員により、5つの審査基準（①文章・図表の表現が分かりやすいか、②マップ作成の目的・テーマがしっかり表現されているか、③個性的な工夫やアイデア



第1図 応募した子供の学年構成



写真1 最優秀賞作品

「もしもに備えるもしも賀茂川がはんらんしたらどうするの? MAP」

が凝らされているか、④全体のバランスはよいか、⑤十分な情報が盛り込まれているか)に基づいた厳正な審査が行われた。

審査の結果、最優秀賞1点(写真1)、優秀賞1点、入選3点、佳作6点が選ばれた(第1表)。また、入賞作品より10点は「第17回全国児童生徒地図優秀作品展」に推薦された。

### 3. 表彰式と作品展示

入賞した11点の作品については、2014年10月25日、立命館大学創思館カンファレンスルームで行われた「GIS Day in 関西 2014」のシンポジウムの中で、表彰状ならびに副賞の授与が行われた(写真2)。その後、歴史都市防災研究所の展示ルームに移動し、入賞者の作品を見ながら簡単な解説とインタビューが行われた。すべての応募作品は2014年10月27日から2015年1月7日まで、歴史都市防災研究所の展示ルームに展示された。



写真2 表彰式の様子

第1表 受賞作品について

賞名	学年	参加者数	作品のタイトル
最優秀賞	5年	1名	もしもに備える もしも賀茂川がはんらんしたらどうするの? MAP
優秀賞	3年	1名	もし下校している時かみなりがなったらどうする? (わたしの通学路安全マップ)
入選	6年	1名	突然おそってくる『土砂災害・水害』ご近所 防災MAP
入選	3年・1年	2名	いのちをまもるマップ
入選	5年(2名)・4年・2年	4名	『いざ』という時の安心安全マップ
佳作	6年	2名	私たちの通学路危険・安全マップ
佳作	5年	1名	私の住む街『宇品』の歴史に学ぶ浸水キケンマップ
佳作	5年	2名	学校から高台(比治山)への逃げ方マップ 釜石の奇跡～広島版～ ・学校から高台(比治山)への逃げ方マップ 津波から一番に逃げよう
佳作	5年	1名	私の安全マップ
佳作	4年	1名	賀茂川 水害から地いきを守るMAP
佳作	6年	1名	災害時の下校MAP



## IV. 応募者へのアンケート調査に基づく地域の安全安心マップづくりの意義の考察

### 1. 応募者アンケート調査の概要

第8回マップコンテストでは、例年と同様に、保護者がアンケート用紙に回答し、応募作品と同時に提出することが求められた。

調査表の設問は、回答者の属性に関するものが3問、コンテストの参加動機に関するものが2問、安全安心マップの作成と地域の安全安心への関心が6問、お住まいの地域の安全安心への取り組みが2問と、マップ作成の意義と問題点が1問で構成された(第2表)。

48部の調査票が配布され、計42部(回収率82.5%)が回収された。京都教育大学付属京都小学校から応募した7点の作品に対し、小学校の先生による1部の回答があった。

### 2. 調査結果を踏まえたマップづくりの意義

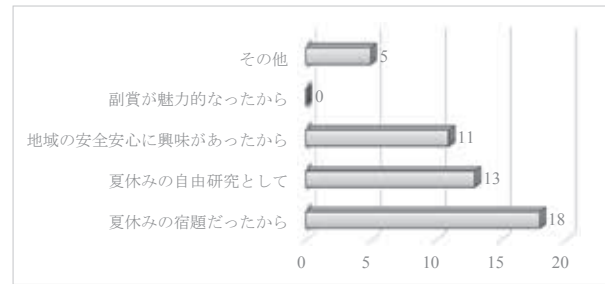
#### (1) 回答者の属性

回答者の構成は、30代が17名(40.5%)、40代が18名(42.9%)、50代が6名(14.3%)、60代が1名(2.4%)であった。また性別から見ると、男性15名(35.7%)、女性27名(64.3%)であった。

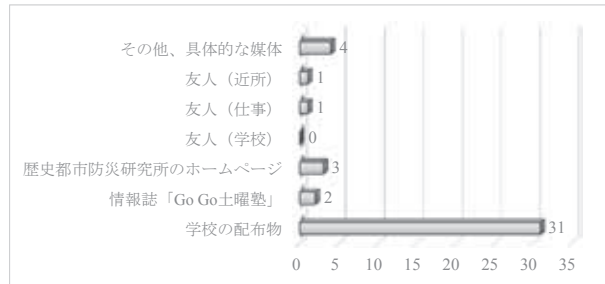
#### (2) コンテストへの参加動機

マップコンテストへの参加動機を問う質問では、18人が「夏休みの宿題だったから」と回答し、13人が「夏休みの自由研究として」、11人が「地域の安全安心に興味があったから」、その他(「集落の活性化」や「社会学習として」など)が5人であった(第2図)。

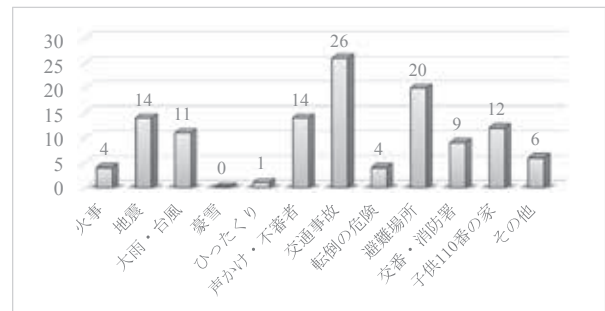
また、本コンテストに関する情報の入手元については、「学校の配布物」という回答が31人、「歴史都市防災研究所のホームページ」が3人、その他(「兵庫県三木防



第2図 マップコンテストへの参加動機について (n=42)



第3図 マップコンテストの情報収集元について (n=42)



第4図 マップ作成時に重要視する情報について (n=41)

災センター」、「醍醐中央図書館」など)と回答したのは5人であった(第3図)。

#### (3) マップ作成と地域の安全安心への関心について

災害、犯罪など、マップ作成の際に重要であると考えられる情報に関する質問(複数選択)では、41人が回答し、「交通事故」を選んだ人が26人、「避難場所」を選んだ人は20人、その次は「地震」と「声かけ・不審者」を選んだ人がそれぞれ14人、「子供の110番の家」は12人、「大雨と台風」が11人の順となった(第4図)。

また、安全安心マップづくりの前後において、地域の安全安心に関する関心が高まったかという質問に対し、42人が回答し、子供の7割以上(31人)が「とても高まった」、3割未満の11人が「やや高まった」という結果になった。保護者の関心については6割以上(27人)が「とても高まった」、4割未満の15人が「やや高まった」と回答した。

中学生・高校生の部門があれば、将来も参加させたい

第2表 応募者アンケート調査表の設問

分類	設問内容
回答者の属性	①参加した児童数と保護者数、②回答者の年齢、③性別
参加動機について	④参加動機、⑤本コンテストの情報元
マップ作成と地域の安全安心への関心について	⑥マップ作成対象場所、⑦マップ作成時に重要視する情報、⑧マップ作成後の地域安全安心への児童の関心の変化、⑨マップ作成後の地域安全安心への保護者の関心の変化、⑩マップ作成時の保護者と児童の認識の違い、⑪中学生・高校生の部門に応募するかについて
お住まいの地域の安全安心への取り組みについて	⑫地域の安全安心への取り組みに重要だと思う活動、⑬現在地域の安全安心への取り組んでいる活動
地域の安全安心マップ作成の意義と問題点	⑭地域の安全安心マップを作成する意義と問題点について

かという質問に対しては、40人が回答し、参加させたいと答えたのは29件(72.5%)、特に思わないと回答したのは11件(27.5%)となった。

さらに、地域の安全安心に対する保護者と子供の認識の違いに関する質問(自由回答)では、「目線が異なる」という回答以外に、親と子供の危険に対する認識の違いが多かった。例えば「子供は公園のまわりのみが危険だと考えていたが、マップ作成を通じて、家の目の前の交差点やいつも通っている道も危険であることが確認された」、「子供は交通量の多いところを、親は人通りの少ないところを危険と感じていた」、「子供は、駐車場がまわりにある道や周りが畑の道は、見通しが悪い訳ではないしなぜ危険なのか疑問だった」など、子供が危険と考える場所や範囲、その度合いなどが限られていることから、防災、防犯、交通事故への認識が不十分であると考えられる。その一方、「普段目にする場所なので大人は見落としてしまうポイントが多い中、むしろ子供のほうが細かいことによく気づいているなと思った。大人のほうが勉強になっていると思う」という回答もあり、地域の安全安心マップづくりは、子供の防災教育だけでなく、大人の防災意識の向上にもつながることが再確認された。

#### (4) 地域の安全安心への取り組みについて

地域の安全安心に対する取り組みを12種類の項目に分けて、重要と思われる活動と、現在取り組んでいる活動をそれぞれ設問した(複数回答)。その結果を第5図に示す。

まず、地域の安全安心への取り組みの中で重要な活動に対しては、住民同士の挨拶がもっとも多く24件であった。その次は地域内の情報共有と学校での防災・防犯教育が18件で、家庭での防災・防犯教育が14件、警察官による巡回が11件、集合登校・下校と防災関連

グッズの携帯(子供向け)がそれぞれ7件等々の順であった。

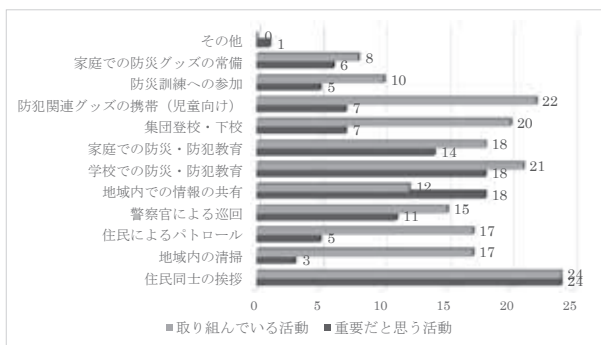
また、実際に取り組んでいる活動に関しては、同じく住民同士の挨拶が24件でもっとも多く、防災関連グッズの携帯(子供向け)が22件、学校での防災・防犯教育が21件、集合登校・下校が20件、家庭での防災・防犯教育が18件、住民によるパトロールと地域内の清掃がそれぞれ17件、防災訓練への参加が10件等々であった。

回答者が重要だと思う地域の安全安心に関する活動より、実際に地域で取り組んでいる活動が多い傾向にあり、地域での防災・防犯・交通事故防止などへの取り組みが広く展開していることが考えられる。しかし、防災訓練への参加は10件(23.8%)と、比較的に少ない結果となり、東日本大震災が発生した2011年の調査結果34.0%<sup>4)</sup>に比べ10%減少した。家庭での防災グッズの常備(8件、19.0%)への取り組みも比較的に少ないことから、災害時のみならず、日頃からの自然災害への備えが必要であると考えられる。

#### (5) 安全安心マップを作成する意義と問題点について

親子で一緒に地域の安全安心マップを作成する意義(自由回答)として、「子供と地域を見直す機会となった」、「自分の住んでいる地域の危険を再確認できる」、「危険な場所を知って事故を未然に防止することができる」など、普段住んでいる地域の実状を確認するとともに、防災・防犯意識を向上に役立つという意見が多かった。またマップづくりは、親子のコミュニケーションと情報共有の有効なツールとなり、「改めて親子で自宅周辺の危険な路について話し合う機会が得られた」、「地域の安全安心を子供の目線で考えることができた」、「親と子供で共通認識を持つことができた」などの意見も多かった。

安全安心マップ作成の問題点(自由回答)としては、「子供に中心になってマップを作成してもらいたくも思っていない、データを集めたり、マップを描いたり作業は手助けが必要なため、親の意見が中心になってしまふ」、「地域の資料が集めにくかった」、「作成のため、うろろろしている様子が逆に自分達が不審者に思われてしまっていた」などマップ作成の際の苦労した点などが挙げられた。また、「マップづくりを通じて危ないことを知っていても、いざという時に何もできない可能性があるため、訓練などをして経験を積むことへ結び付けた



第5図 地域の安全安心への取り組み (n=42)

い」、「せっかく作っても、作った本人にしか分からないのが残念、地域の人たちと共有できたらいい」、「気付きはあっても、改善には限界があり、より多くの協力が必要だと感じる」などマップを作るだけでなく、マップ作成後の情報の発信や、防災・防犯活動への継続的な取り組みが必要であることが指摘された。

## V. おわりに

本報告では、2014年に実施した「第8回夏休みにみんなで作る地域の安全安心マップコンテスト」の事業について、企画概要とコンテストの実施結果をまとめるとともに、応募者に対するアンケート調査の集計から、地域の安全安心マップづくりの意義と問題点を考察した。

第8回地域の安全安心マップコンテストは、広報活動(3月～5月)、講習会の実施(応募があれば、5月～8月)、作品の募集(8月～9月)、審査(10月上旬)、表彰式(10月下旬)、応募作品の展示(10月～12月)という流れで実施され、全国各地から48点の作品の応募のうち、最優秀賞1点、優秀賞1点、入選3点、佳作6点が選ばれた。

今回のマップコンテストを通じて、地域の安全安心マップづくりは、参加者の防災・防犯意識を向上させるとともに、防災に関する情報共有の有効なコミュニケーションツールであることが再確認された。一方、マップを作成する際に、情報収集に苦労したことや、子供が主体としてマップを作成することが難しいなどの問題があり、参考資料やウェブサイトを提示するなど、応募者たちが使いやすいマップ作成マニュアルの更新が必要であ

ることが明らかになった。

また、応募者の回答から見られるように、マップを作るだけでなく、マップ作成を通じて得られた知見を共有し、実際に災害や事故に遭遇した際に適切に対応できるよう、日頃からの防災・防犯活動に展開していくことが重要であると考えられる。加えて、マップ作成により確認された問題点を改善するために、より多くの協力が必要不可欠であり、子供の防災・防犯教育のみならず、学校、地域住民と行政などの連携や地域の防災・防犯活動の展開につながり、地域コミュニティの強化と防災力の向上が期待される。

## 注

- 1) 厚生労働省「死因順位別にみた年齢階級・性別死亡数・死亡率・構成割合」、平成21年の人口動態統計、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii09/deth8.html>
- 2) 国土地理院「地図づくりからはじめる地域の安全づくり」、国土地理院広報第454号、2006。<http://www.gsi.go.jp/WNEW/koohou/454-1.htm>
- 3) 第1回から第7回の地域の安全安心マップコンテストの事業報告は、京都歴史災害研究第9号から第15号に掲載されている。
- 4) 中村琢巳・赤石直美・塚本章宏・花岡和聖・村中亮夫・吉越昭久「歴史都市防災研究センターによる小学生を対象とした防災教育の取り組み—「第5回夏休みにみんなで作る安全安心マップコンテスト」の事業報告—」、京都歴史災害研究13、2012、43～48頁

## 参考文献

- 片田 敏孝「子供たちを守った「姿勢の防災教育」—大津波から生き抜いた釜石市の児童・生徒の主体的行動に学ぶ—」、特集 東日本大震災と災害情報、災害情報 No.10、2012、pp.37-42
- 梶 秀樹・塚越 功『都市防災学：地震対策の理論と実践』、学芸出版社、2012、pp.173-177